

また業務用としては、バイオマスへの対応が鍵になるとみている。生ごみを多く出すファミリーレストランなどを想定。これをもとにメタンガスを発生させてエンジンを駆動する。メタン生成部分などの基本的開発に着手しており、1日150kg程度の生ごみで1日稼働させることが可能とみている。

■時代にマッチ

ディセンコ社は来春の本格発売に向けて、ヨークシャー州シェフィールドに年産35万台の量産体制を整えている。大きなマーケットの一つは当然EU域内で、プロパンガスやメタンガスなどを利用したコージェネ需要が強くあるという。

スターリングエンジン自体は珍しい訳ではない。むしろ大人向けの模型エンジンなどでは高額なモデルも人気がある。これが実用エンジンとして注目されるのも、コージェネレーションの普及とバイオマスの活用機運が高まってきた時代とマッチングしたからである。

◆日本エコロジア、天然素材の害虫駆除液材で4年後上場目標

日本エコロジア(東京都渋谷区代官山町20-23-606、03-3780-4070)は、天然素材を原料とした害虫駆除液材を開発した。最も駆除が困難なチャバネゴキブリにも即効性が有ることを確認しており、今後全国的な販売網の構築を図る。先に発売している消臭・抗菌作用のある液材なども含めて、4年後には70億円の売上げを達成して上場を目指す。

同社が研究している天然素材の主成分は、インドやアフリカなどに生育する「ニーム」(日本語名インドセンダン)を活用する。ニームはイナゴの糞来で他の植物が食べ尽くされても、残っていたことから防虫作用などが着目されたもの。お茶として飲用されたり、石けんの素材などとして用いられている。日本エコロジアでは、日本の化学メーカーが研究していた技術をベースにして、製品化を進めていた。

まず商品化したのが消臭・抗菌・防カビ効果のある「by LOHAS」(バイロハス)で、噴霧するだけでタバコやコロンなどのにおいが消え、抗菌効果が高いことからホテルなどで採用されている。

今回開発した害虫駆除液材は、これをもとに粘着性を高めたもので、ニームなどの天然植物成分で構成している。飲食店の厨房で害虫の駆除を行う場合、有機リン系殺虫剤などを使用するが、人間への影響がクローズアップされており、将来的な使用は困難との見方もある。一方で、天然素材由来の製品も開発されつつあるが、即効性に乏しいため、実際には使用されていないのが実情。同社では、最も駆除が困難なチャバネゴキブリに対しても即効性を実証することで、これまで難しかった安全性との両立を実現した。

今後同社では、全国で代理店の展開を図るほか、大手の害虫駆除業者などに対してOEM販売を行っていく。また害虫忌避液も開発、これを塗布することで虫が寄りつかなく